

## 巻 頭 言

学会の副会長に若い人が2名加わり、最年長者が押し出されて、というわけではないが、湊三郎会長の後をわたしが継ぐことになった。昨年12月の学会総会でのこの決定を自然の成り行きと、ためらう気持ちを呑み込んで重く受け止めたいと思う。

・振り返ると、これまた想像もしなかったことに、教壇に立つのを止めてからも学会に出席し、年報に投稿して数年が過ぎた。勤めがあるときは勤務が優先、ゆっくり考えていられなかったことに時間を掛けられるようになったから、ということはあると思う。

もともと、テーブルに手をつけて立ち上がったとたん何を取ろうとしたのだったか忘れていて、といったことがめずらしくない年齢になった。読んだり書いたりしているときも、したばかりのことを忘れる。集中を持続する力はなくなった。机代わりの座卓を前にする日数は週に1日か2日、数学のことをまともに考えている時間はたかが知れている。

ところが学会で発表を聞いているうちに、自分の衰えを忘れる。12月の年会では、講演資料に『緑表紙』、2年以降に扱った乗法では『黒表紙第三期修正版』の乗数先唱を被乗数先唱に変更する」とあるところで目が止まり、思考が迷走し出した。

$7 \times 3$ なら、乗数の3を先に唱えさせたというのは、 $7x$ を「 $x$ の7倍」と読むようなものかと考えていたが、ことは作法の型や躰に類しう単純ではない。7で割る筆算で、乗数先唱の九九だと商に立つ数を先にし7は被乗数にして後に唱えたのか、それとも7を先にして商の各桁を探したのか。よく分らないまま、 $7 \times 3$ の答と $3 \times 7$ の答は同じだから、かつて九九の全部ではなく全九九表の片側だけ暗唱させていたことに思いが及ぶ。

大学の恩師に「学校では九九を半分だけ覚えさせられたと思うのですが、 $7 \times 3$ なら、 $3 \times 7$ とひっくり返して唱えたのですか」と訊ねたことがあった。先生は、わたしの問いにしばらくの間沈黙思考、分らないという。どう習ったかも定かでないと答えられた。

こんなことを思い出したのは学会から一週間ほどしてからである。その先生がソロバンを習ったかは訊かないでしまったが、割り算九九は身に付けておられなかったのだと思う。

思い出しつついでにソロバンのことから、「 $3 \times 7$ 」という記号式で算数の学習を考えてはだめだと気付いた。式や記号になる前に、計算は「サン・シチ・ニジュウイチ」という音声で覚えられる。それが、塵劫記に縦書きで載っていたことを思い起した。

学齢前の子どもは音声で数える。記号で数えるのではない。なのに、わたしは西洋式左横書きの数式で思考していた。風呂で母親に九九を教え込まれた児が左利きで、学校で習う $7 \times 3$ を右から読んでも答は合う。掛ける数と、掛けられる数との区別を順守する気持は、塵劫記の時代にはなかったのではないか。

思考は学校教育の外に、幼年期の日本算術の心情へとおろおろ走り出したようだ。

ともあれ、少子高齢化の時を反映しているのであろうか、学会会員は少若高齢化の傾向にあるとのこと。これも成り行きと受け止め、ただし研究活動の老化とはならないように用心せればと念じ、ひそかに若化を期待しているところである。